

氏名(本籍)	さ さ き ひろ こ 佐々木 裕 子 (岡山県)		
学位の種類	博 士 (心 理 学)		
学位記番号	博 乙 第 2392 号		
学位授与年月日	平成 20 年 7 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	投影次元の違いによる心理検査法の理解 －ハンドテストとロールシャッハ法のテストバッテリーを中心に－		
主 査	筑波大学教授	医学博士	小 川 俊 樹
副 査	筑波大学教授	博士(体育科学)	中 込 四 郎
副 査	筑波大学講師	医学博士	森 田 展 彰
副 査	筑波大学講師	Ph. D.	堀 越 勝

論 文 の 内 容 の 要 旨

1. 問題と目的

心理検査法は、従来大きく質問紙法、作業検査法、投影法に分類され、それぞれが単純に意識・前意識・無意識レベルを捉える検査と理解されてきたが、これでは心理検査法が捉える人格領域を十分に理解することはできない。そこで本論文では、Wagner (1971) によって提唱された構造分析を手がかりに新たに「投影次元」の概念を提起し、本概念を基により緻密な心理検査法理解を試みた。すなわち、現実適応次元（現実次元）と体験調整次元（体験次元）の二次元を仮定し、さらに各次元にはそれぞれ意図的側面と無意図的側面があると仮定することにより、心理検査法を4つの領域のどこに焦点を当てた検査法であるかといった視点から理解し直すことを可能にした。その上で、投影法テストバッテリーであるハンドテストとロールシャッハ法を取り上げ、両検査に投影次元がどのように表れているか、また、投影次元の概念が心理検査法の理解と統合にどのように役立てられるか、その妥当性と臨床的意義について検討し、考察することを目的に研究を行った。

2. 対象と方法

研究1では、日本人大学生70名に対し個別に実施した結果から、ハンドテストの各カードの反応特徴について検討を行った。研究2では、日本人大学生140名を対象にSD法の結果から刺激価について検討した。研究3では、英語版の形容詞対を作成し、米国人大学生169名と日本人学生140名の比較検討を行った。研究4では、被害妄想を持つ日本人男性のハンドテスト反応について検討を行った。一方、研究5では、男性が怖いと訴える女性のロールシャッハ反応から、内的体験過程と考えられる心的安全空間がどのように表れていると考えられるか検討し、研究6では、分離不安を呈した男子の面接初期と終結期のロールシャッハ反応に多く出された通景・立体反応の検討から、体験次元がどのように表れているかについての検討を行った。

これを受け、ハンドテストとロールシャッハ法を投影次元によってどのように統合解釈できるかについて、研究7では両検査に攻撃と被害という、相反する反応を出した不登校女子中学生について、研究8では情緒不安定で来談した女子大学生の対人反応の違いを検討した。さらに、投影次元による統合解釈を臨床像と比

較するため、研究9では、同じ摂食障害の症状を出しながら臨床像に違いの見られた2つの事例の依存と敵意といった両価性について検討した。研究10では、入院時と退院時のハンドテストとロールシャッハ法を比較検討することで、治療的变化を投影次元によってどのように理解することが可能かについて検討した。

3. 結果

ハンドテストの刺激は日米間で大きな違いはないが、カード系列は刺激に対する回復プロセスを三系列から捉えられるといった現実次元を捉える上で非常に適した構造にあることが考察され、また、現実とのコンタクトレベルをハンドテストの質的スコアから検討できることを確認した。また、ロールシャッハ法に関しては、内的体験過程である心的安全空間の状態が非常に良く表れること、ロールシャッハ通景・立体反応には自己の問題が反映されることなどが確認され、体験次元を捉える上で貴重な情報となることが確認された。さらに、ハンドテストとロールシャッハ法の統合解釈により、両検査の違いや矛盾を投影次元の概念から相補的に理解することができる。そして、臨床像の違いを心理検査法によって明確に意味づけることが可能であることが示され、現実次元を反映するとされるハンドテストには臨床像の変化（治療的效果）が明示され、体験次元を反映するとされるロールシャッハ法には、治療的变化だけでなく、被検者の普遍的な内的体験様式も表れることが明確に示された。

4. 考察

以上の研究から、本論文で提起した投影次元の概念は、心理検査法解釈に重要な情報をもたらし、各検査を統合的に理解して臨床像をより明確に捉えることを可能にすることが示された。このような投影次元概念による心理検査法の利用は、診断補助としてのみの心理検査法使用に留まらず、心理検査法特に投影法を治療的関与の一環として用いる上で非常に有効であると考えられた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

各種の投影法検査は、一般に無意識水準の測定に適していると考えられているが、本研究は心理臨床の場でテストバッテリーとして採用されているハンドテストとロールシャッハ法を手がかりに、独自の視点である「投影次元」を基に投影法検査が把握する人格領域を明らかにした。この点で、各種投影法検査の特徴を明らかにするとともに、投影法検査による人格理解をより緻密なものとしており、きわめて有意義な研究である。しかしながら、本研究において採用された投影法検査は代表的検査とは言え、ハンドテストとロールシャッハ法の2種類と限定的であり、他の投影法検査がどのような人格領域と関連しているのかは今後の問題として残されている。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。